令和５年度

北九州市立看護専門学校

社会人入学試験

国 語 問 題 用 紙

（ 50 分 ）

＜注意事項＞

1　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。

2　この問題冊子には、問題用紙が 17 ページまであります。

3　落丁・乱丁のある場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

4　解答用紙には、受験番号と氏名・フリガナを忘れずに記入してください。

5　問題冊子は回収します。

受 験 番 号

第1問　次の文章を読んで、後の問い（**問1～問8**）に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

[1]現在のインターネットは人間を「考えさせない」ための道具になっている。かつてもっとも自由な発信の場として期待されていたインターネットは、いまとなっては、もっとも不自由な場となり僕たちを抑圧している。それも権力によるトップダウン的な㋐カンシではなく、ユーザーひとりひとりのボトムアップの同調圧力によって、インターネットは息苦しさを増している。

一方では予(あらかじ)め期待している結論を述べてくれる情報だけをサプリメントのように消費する人々がいまの自分を、自分の考えを肯定し、安心するためにフェイクニュースや陰謀論を支持し、拡散している。そしてもう一方では自分で考える能力を育むことをせずに成人し、「みんなと同じ」であることを短期的に確認することでしか自己を肯定できない㋑イヤしい人々が、週に一度失敗した人間や目立った人間から「生贄(いけにえ)」を選んでみんなで石を投げつけ、「ああ、自分はまともな側の、マジョリティの側の人間だ」と安心している。

これらはいずれも、「考える」ためではなく「考えない」ためにインターネットを用いる行為だ。ネットサーフィンという言葉がa機能し、インターネットが万人に対しての知の大海として開かれる可能性は、つい最近まで信じられていたはずだ。しかし、もはやそれは遠い遠い過去のことのような錯覚を僕たちにもたらしている。

そこで、僕はひとつの運動をはじめようと考えている。「遅いインターネット計画」と呼んでいるそれは、あたらしいウェブマガジンの立ち上げと、読者に十分な発信能力を共有するワークショップが連動する運動だ。本書が発売されるころにはおそらく、試験運用がはじまっているはずだ。

この国を包み込むインターネットの（特にTwitterの）「空気」を無視して、その速すぎる回転に巻き込まれないように自分たちのペースでじっくり「考えるための」情報に接することができる場を作ること。Google検索の引っかかりやすいところに、5年、10年と読み続けられる良質な読み物を置くこと。そうすることで少しでもほんとうのインターネットの姿を取り戻すこと。そしてこの運動を担うコミュニティを育成すること。そのコミュニティで、自分で考え、そして「書く」技術を共有すること。それが僕の考える「遅いインターネット」だ。

なぜ「遅い」インターネットなのか。それはいまのインターネットの行き詰まりの原因はその「速さ」にあると考えるからだ。もちろん、

「速さ」はインターネットの最大の武器だ。世界中のどこにいても即時に情報にアクセスできる。この「速さ」がインターネットの武器であることは間違いない。しかし、インターネットはその「速さ」と同じくらい「遅く」接することができるメディアでもある。2インターネットの本質はむしろ、自分で情報にアクセスする速度を「自由に」決められる点にこそあるはずだ。1日単位で話題が回転する新聞やテレビや、週や月単位で回転する雑誌などと異なりインターネットは「速く」接することもできれば、「遅く」じっくりと、ハイパーリンクや検索を駆使して回り道して調べながら接することもできる。そんなメディアがいま、必要なのではないか。そこで、僕はいまあえて速すぎる情報の消費速度に抗(あらが)って、少し立ち止まって、ゆっくりと情報を咀嚼(そしゃく)して消化できるインターネットの使い方を提案したい。そうすることで僕たちはより自由に情報に、世界に対する距離感と進入角度を決定できるはずだ。

ここで映画／テレビの、つまり映像の20世紀とインターネットが支配するネットワークの21世紀の比較について考えてもらいたい。映画とは能動的な観客を想定したメディアであり、そしてテレビとは受動的な観客を想定したメディアである。しかし、インターネットはその両者をホウ㋒セツし得る。

本来のインターネットは映画よりも能動的に情報を取捨選択することもできれば、テレビよりも受動的に情報の洪水をただ浴び続けることもできる。より正確には、現代の情報技術は人間の常に変化する能動性に対し、柔軟に対応することを可能にする。人間とは、そもそも映画が想定する能動的な観客でもなければ、テレビが想定する受動的な視聴者でもない。コンピューターの発展によって、僕たちははじめて人間そのものにアプローチすることができるようになったのだ。

しかし、いまインターネットと呼ばれているものは、いやFacebookやTwitterに代表されるソーシャルネットワーキングサービスを中心に再組織化されつつある現在の情報環境は、この速度を決定する主導権そのものを人間から剝奪している。僕たちは自分たちの情報に対する速度と進入角度を、いまソーシャルネットワーキングサービスのプラットフォームに明け渡しているのだ。

たとえば、タイムラインに流れてくる情報に対しほとんど脊髄反射的に反応して「発信」する人々は、あるいはニュースサイトが閲覧数目的で選ぶ［　A　］な見出しに釣られタイムラインの「空気を読み」、週に一度生贄として選ばれた目立ちすぎた人や失敗した人に石を投げつける人々は果たして「思考している」と言えるのだろうか。

もちろん彼ら自身は自分で事物について考えをめぐらし、自分の考えを発信しているつもりなのだろう。だがこうした人々の発信は驚くほ

どに一様で、そしてかなりの割合で情報の内容に対する検証を欠き、タイムラインの潮目を読んだだけの極めて［　B　］な内容に留まっている。だからこそ何ものでもない彼らは、その実タイムラインに流されるだけであるにもかかわらず、まるで、自分が内実を伴った意見を発信しているかのような、世界に素手で触れているかのような錯覚に陥ることのできるこの発信の快楽に溺れていく。そして、何ものにもなれない自らの人生を呪うことしかできない人々は、その現実から目をそらすための麻薬を用いることでより愚かに、ボン㋓ヨウに、そしてイヤしくなっていくのだ。

あるいは、こう考える人も多いだろう。問題は既にインターネットの、とりわけ本書が問題にしているメディアの次元にはない、と。もちろん、僕にもかつてそう考えた時期が存在した。

インターネットが本質的に「速い」メディアならその外側にある本質的に「遅い」メディア、たとえば紙の本に戦略的に撤退すべきなのではないか。あるいはインターネットが代表するメディアの問題をその外側から解決するために、実空間に人々が集うコミュニティを拠点にすべきではないか、と。［　X　］

または、この種の批判も容易に想定できる。メディアからプラットフォームへの移行こそが、今日の情報環境の前提である。したがって、ディズニー的に映像の世紀に撤退する（今日の情報環境に最適化し、インターネット上で多くシェアされるものを目指す）戦略を取るか、Google や Facebook のようにインターネットのプラットフォームを洗練させることでの解決を試みるべきではないか、特に後者のアプローチこそが有効なのではないかと。

たしかに僕たちはメディアからプラットフォームへの移行が、人類を前に進めると強く信じていた。情報を単に受け止めるだけではなく、自ら発信することで人間はより熟慮し、多角的な視点から事物を吟味するようになると考えていた。しかし、いま僕たちはその前提を疑ってかかるべきだ。この四半世紀のあいだに発信能力を得た人類が証明したことは、この前提が誤りであったという端的な事実だ。たしかにインターネットは多様な情報発信を可能にするメディアである。だが同時にこのインターネットという素晴らしい装置は、発信能力を与えられたところで発信に値するものをもっている人間はほとんどいないことを証明してくれた。たしかに世界は多様だがこれらの多様さを確保しているのは一握りの天才と（言葉の最良の意味での）変態たちで、大抵の人間の考えていることは少なくとも自己評価ほどにはユニークではない。いや、はっきり言ってしまえば一様なものに過ぎない。そのことをインターネットは証明してくれたのだ。

誤解しないでほしいが、僕はインターネットが人々に与えた発信能力を取り上げるべきだとはまったく考えていない。ただ、僕らが「メディアからプラットフォームへ」を合言葉にして、人々に発信能力を与えることが、人類を前に進めることと同b義だというイデオロギーをシン㋔ポウすることはもはや不可能だと告げているのだ。

この四半世紀のあいだに、人類の何割かは確実に発信することでより愚かになっている。少なくとも3発信する能力を得ることで、その愚かさを表面化させている。この現実から、僕たちは目をそらすべきではない。何の知見もスキルもなく、ただ考えをダダ漏れさせることを手放しで礼賛できる時代は確実に終わった。もちろん、こうした匿名／半匿名ユーザーの集合知の生むクリエイティビティは否定しない。しかし、そのためには多くの幸福な偶然とシビアな条件が必要であることは明白だ。僕たちは、インターネットの匿名性の生むクリエイティビティを正しく受け止めるためにも、匿名性が保証される場を選定し、限定しなければならないのだ。

インターネット上のプラットフォームはなし崩し的に発信者と受信者の境界を喪失させた。そしてその結果人々は発信の快楽に溺れることで、より安易に、愚かに、そして拙速になっていった。しかし、今日のインターネット・プラットフォームは情報をスローに受信させる術と動機をもたない。だから僕はあくまでメディアの、記事を発信する側のアプローチで読者に情報をスローに受信する文化を育成しようと考えている。そしてその上で読者たちにスローに再発信するノウハウを共有することができないかと考えている。

（宇野常寛（つねひろ）『遅いインターネット』より）

問1　二重傍線部㋐～㋔の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

㋐　カンシ

①　カンベンな方法を選ぶ
②　諸般の事情をカンアンする
③　トンネルがカンツウする
④　会計カンサを受ける
⑤　カカンに反撃する

㋑　イヤしい

①　ヒガンを達成する
②　ヒソウな理解にとどまる
③　ヒサクをみんなで練る
④　投票によってカヒを決する
⑤　ヒクツな態度をとる

㋒　ホウセツ

①　自然のセツリにしたがう
②　作品のコウセツを問わない
③　重要性をリキセツする
④　セツジョクを果たす
⑤　ミッセツな関係にある

㋓ ボンヨウ

① 施設の拡充をヨウボウする
② チュウヨウを得た意見
③ ヨウショクが衰える
④ ヨウコウが降り注ぐ
⑤ エイヨウを摂取する

㋔ シンポウ

① ロウホウが舞い込む
② 皆にチョウホウがられる
③ 今後のホウフを語る
④ ホウノウ相撲をとる
⑤ 子どもをホウニンする

問2　二重傍線部a、bと同じ意味で用いられているものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

a
① 機密
② 契機
③ 機構
④ 動機
⑤ 機敏

b
① 義理
② 信義
③ 義父
④ 義士
⑤ 一義

問3 空欄 A 、 B を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

A ① 理性的　② 現実的　③ 扇情的　④ 刹那的　⑤ 象徴的

B ① 直観的　② 観念的　③ 実用的　④ 即物的　⑤ 表層的

問4 空欄 X に入る〔1〕～〔4〕の文を正しく並べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

〔1〕だから僕はとっくの昔にこれらのアプローチを実践している。

〔2〕もちろん、これらの指摘は正しい。

〔3〕そしてその上でもまだ足りないものを補うために僕はいま、「遅く」「インターネット」を使用する運動を提案しているのだ。

〔4〕僕の名前で検索すれば、僕が10年以上紙の雑誌や書籍を発行し続けていることや、近年は読者を組織して私塾的な勉強会の類を、それも自分の中心的な仕事として継続している事実が記録されているはずだ。

① 〔2〕→〔1〕→〔4〕→〔3〕　② 〔2〕→〔3〕→〔1〕→〔4〕

③ 〔2〕→〔4〕→〔3〕→〔1〕　④ 〔4〕→〔1〕→〔2〕→〔3〕

⑤ 〔4〕→〔3〕→〔2〕→〔1〕

問5　傍線部1「現在のインターネットは人間を『考えさせない』ための道具になっている」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① 情報を発信せずに、自分がまともな人間であることを確認するためだけにインターネットを用いているということ。
② 万人に対して知的空間が開かれておらず、多くの人間を考えさせる場にインターネットがなっていないということ。
③ 同調圧力を強くかけることで、人々の考えをみんな同じにするためにインターネットが機能しているということ。
④ ゆっくりと情報を吟味するのではなく、自分の考えを肯定するためにインターネットを使用しているということ。
⑤ 玉石混交の情報が流れているために、何が正しいのかがインターネットでは判断できなくなっているということ。

問6　傍線部2「インターネットの本質」とあるが、これはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① インターネットは他者から見張られたり、強制されたりすることなく、人々がひとりで情報に接することができる。
② インターネットは能動的にも受動的にも情報を取捨選択でき、変化する人々に対して柔軟に対応することができる。
③ インターネットは新聞やテレビよりも速くて正確な情報を提供することで、人々を正しい方向に導くことができる。
④ インターネットは世界中のどこにいても自由にアクセスができ、誰もが即時に必ず情報を手に入れることができる。
⑤ インターネットは事物についてめぐらした自分の考えを自由に発信し、多くの人と考え方を共有することができる。

問7　傍線部3「発信する能力を得ることで、その愚かさを表面化させている」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① インターネットは広範に普及したために、何のスキルがなくても情報を発信することができるようになったということ。
② インターネットは名前を知られずに情報を発信することができるため、他者を簡単に誹謗（ひぼう）するようになったということ。
③ インターネットは人々に情報発信能力を与えたが、大抵は発信に値するだけの独創的な考えをもっていないということ。
④ インターネットはさまざまな情報を受信できるが、人々はその情報を適切に処理する能力を持っていないということ。
⑤ インターネットは誰もが自由に情報を発信することができるため、自分の頭で考える力を失ってしまったということ。

問8　本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① Google検索などにかからない情報をインターネットにあげて、単に消費されるだけではない情報を提供しようとしている。
② 20世紀が映画とテレビの時代で、21世紀はインターネットの時代であると考えられていたが、実はそうではなかった。
③ 紙の本や実空間に人々が集まるコミュニティを取り戻すことが、人間が主体であるメディア社会のためには必要である。
④ ウェブマガジンという形式ではあるものの、自分たちのペースでじっくりと考えることができる場を作ろうとしている。
⑤ ほんとうのインターネットは「遅いインターネット」なので、「速さ」を捨てて本来のインターネットに戻るべきである。

第2問　次の文章を読んで、後の問い（**問1**～**問8**）に答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 23 の番号を付してある。また、設問の都合上、表記を改めたところがある。

1　学術研究は、しばしば「それは何の役に立つんだ？」という疑問を投げかけられます。ノーベル賞をもらうような大発見でさえ、必ずメディアからそういう質問を受ける。でも、研究の意味がわからないのは、大学の外にいる一般人だけではありません。同じ大学にいる研究者同士でさえ、分野が違えば他人の研究が「それに何の意味があるんだ？」と理解できないことはいくらでもあります。

2　［　あ　］、研究している本人も、その先に何があるのかはよくわかっていません。とりあえず「こうだろう」という仮説は立てますが、やってみなければわからない。何度も失敗しながら真相に迫っていくわけですが、やっと結論らしきものが見えてくると、そこから新たな謎が浮上することも少なくありません。

3　そうやって謎を解き続けることに何の意味があるのかは誰にもわからないけれど、後で振り返ってみれば、そこで誰かが謎を解いたおかげで、役に立つものが生まれたことがわかる。科学とはそういうものです。たとえば電子や電磁波も、発見されたときは誰も役に立つとは思っていませんでした。

4　［　い　］、そこに謎や不思議があるかぎり、「ああでもない、こうでもない」と無駄な遠回りをしながら解明の努力をくり返すのが研究というものです。でも、新しいものを生む研究とはそういうものですし、それを経験させるのが大学の教育だと私は思っています。

5　これは個人的な遊びの話ですが、以前、実家の庭で焚（た）き火をやりたくなって、大学の近くにある荒れた森で薪（まき）を調達したことがありました。数年前の台風にやられた倒木がそのまま放置されているのを知っていたからです。管理している造園屋さんに「あそこの倒木、もらってもいいですか？」と聞いたら、「これ持ってってええで」とチェーンソーまで貸してくれました。

6　それを持って森に入ってみると、造園屋さんがそこらでかき集めた落ち葉が大量に捨ててあるので、足元はフカフカ。歩きにくいし、落ち葉の下に何が埋まっているかもわかりません。おそるおそるあちこちに移動しながら、焚き火に使えそうな枝を何本もチェーンソーで切り出しました。その作業が一段落して、ふと周囲に目をやると、自分が歩き回ったところが踏みつぶされて、いわば「獣道」のようになっている。なぜこんな話をしているかというと、学術研究とよく似ているからです。

7　誰も手をつけていない研究テーマは、いわば［　A　］の森みたいなもの。そこに道はありません。しかし誰かがそこに踏み込んであ

れこれ研究をすると、そのうしろに獣道ができています。後から森に入った人はその獣道をたどりつつも、途中から違う方向に何かを見つけて踏み込んでいくかもしれません。たくさんの研究者がそこに入れば、いずれ道がきれいに整備され、詳細な地図もつくられるでしょう。そうやって新たな学問体系が確立され、教科書もできるわけです。

8 教科書ができてから勉強する人は、きれいに整えられた体系に「洗練」を感じるかもしれません。でも、それは多くの研究が重ねられた結果にすぎない。そこにいたるまでのプロセスは、それこそチェーンソーを片手に道なき荒野を切り開いていくような「野蛮」なものなのです。

9 もちろん、子どもが受ける教育において、まずは教科書が基本に据えられることに間違いはないでしょう。社会を安全に、正確に、効率よく回すためには、多くの人々が同じ常識や良識を身につけておかなければいけません。先人たちがさまざまな経験に基づいて築いてきた知識やノウハウなどをみんなが同じように教わっておく必要があります。

10 でも、それが教育のすべてではありません。既存の教科書を学ぶだけでは、新しいものは生まれないからです。新しいものを生み出す研究者を育てるには、荒野を切り開いていくために必要な野蛮な作法を身につけさせる必要があります。

11 ここでいう「研究者」とは、学術研究に携わる者だけを指すのではありません。たとえば、どの店にも出せない斬新な味を生み出すラーメン屋のおじさんだって、私は立派な研究者だと思っています。会社で商品開発をしている人はもちろん、新しい売り方を考え出す営業マンにも、研究者的なタイプはいるでしょう。みんながそういう教育を受ける必要はありませんが、社会が常に新しいものを求めている以上、2研究者を育てる教育は誰かが担わなければいけません。大学は、その筆頭です。

12 新しいラーメンを生み出すためのマニュアルがないのと同じで、研究者を育てる大学教育も、本来、マニュアルはありません。自動車教習所なら、所定のマニュアルに沿って車を動かす技術や交通ルールなどを教えれば、免許を取得してどんな道路でも自分で走れるようになるでしょう。しかし研究者が向かうのは、道路も標識もない荒野です。徒歩がいいのか、車がいいのか、あるいは筏（いかだ）でも用意しなければならないのか、移動手段さえ明らかではありません。

13 研究とはそういうものですから、教えられることにもかぎりがあります。指導者も知らない場所に行かせるのですから、「歩いていけ」「筏を用意しろ」などと指示することはできません。教えられるのは、「移動手段として何がベストなのか自分で探れ」ということだけです。また、「どこにどんな危険物が埋まっているかわからないから気をつけろ」と忠告することなどもできるでしょう。未知の領域に踏み込んで

進んでいくために必要な作法や嗅覚（きゅうかく）のようなものを、いっしょに試行錯誤をする中で感覚的に伝授していくのが、大学における研究者教育なのです。既存の知識体系を教えるオンライン授業でやれるようなものではありません。

14 試行錯誤は研究につきものですから、大学教育では失敗を見せることも大事。私も、ある実験を見せる授業で、5年連続で失敗したことがありました。すでに実証されている現象の追試なので、新しいことではないのですが、これがどうしても再現できない。実験の手法をめぐって、学生の前でほかの教員と喧嘩（けんか）になったこともあります。

15 でも面白いもので、その授業は出席を取るわけでもないのに、学生たちが皆勤でした。みんな失敗ばかり見せられているので、「いつ成功するかわからない」とスリルを感じていたのでしょう。「よくこんな授業につきあってくれるね」といったら、「だって自分がいないときに成功したら悔しいじゃないですか」といわれました。べつにわざと失敗していたわけではないので、言い訳がましくはなりますが、このまさに研究者的な感覚は、マニュアルどおりの教育では得られないものでしょう。

16 ちなみに昔の日本では、高校までは教科書的なマニュアル教育、大学では荒野を行く「野蛮」な教育という順番でしたが、米国ではこれがひっくり返っているように見えます。もちろん高校までもマニュアル教育は行いますが、日本ではみんなが同じことを同じようにできるようにするのに対して、米国では小学校のときから「おまえはどうしたいんだ」と問うて自己主張をさせる。なにしろ自分の身を守るために銃の所持が許されている国ですから、まずは自主性や主体性を身につけなければ生きていけない。【Ⅰ】

17 そのため米国では、いわゆる「読み書きソロバン」は後回しになりがち。たとえば三角関数も高校までの教育カリキュラムに入っていなかったりします。したがって、大学入学時点での知識レベルは、日本ほど高くありません。いまはよくわかりませんが、少なくとも私が学生だったころは、「日本の学生は知識レベルが高い」といわれていました。【Ⅱ】

18 よく「米国の大学生は日本よりもはるかによく勉強する」といわれますが、それは彼らが知識に飢えているからでしょう。小学生のころから「自分はこれがやりたい」「自分にはできるはずだ」という意識は強く持っている彼らですが、それを実現するのに必要な知識や技術が足りません。［　う　］大学で一生懸命に勉強しますし、大学の教育カリキュラムもシステマチック。ビジネススクールをはじめ、米国の大学院は研究機関というより専門学校に近いものが多いという印象があります。【Ⅲ】

19 ところが日本ではある時期から、そういう米国と比較して、「わが国の大学教育はなっていない」という声が聞かれるようになりました。教養部が廃止に追い込まれた背景にも、そのような見方があったのだろうと思います。すぐ役に立つ専門的な知識や技術を真面目に勉強させ

る米国の大学と比べると、日本の大学は無駄なことばかりしているように思えたからでしょう。【Ⅳ】

20 たしかにかつての日本の大学教育にもダメなところがいろいろあったことは間違いないでしょう。しかし、教育の順番が異なることを考えれば、米国との単純な比較には意味がありません。米国の大学生は入学前に荒野を歩く「野蛮さ」を身につけているので、大学でそれを教える必要はない。逆に日本の大学生は、入学前に［ B ］の高い武器をいろいろと身につけているので、大学で基本的な知識や技術を教える必要はないのです。【Ⅴ】

21 にもかかわらず、大学でも高校までと同じようなマニュアル教育だけやっていたのでは、野蛮さを身につける機会が得られません。野蛮な学生に文明の知恵を授けるのが米国の大学だとすれば、すでに文明の知恵を持っている学生に野蛮な生き方を教えるのが、本来、日本の大学の役目でした。

22 だとすれば、[3]大学を「高校化」しつつある大学改革は、根本的なところで方向性を間違っているとしか思えません。研究に必要な野蛮性を教えず、「単位の実質化」と称してオンライン授業で間に合うレベルの教育ばかりしているようでは、大学が新しいものを生み出せなくなるのも当然の成り行きです。

23 産業界は大学に「即戦力」の養成を求め、だから「もっと真面目に勉強させろ」といいます。しかし、もしそこでイメージしているのが米国の大学生だとすれば、彼らが企業にとって「即戦力」になるのは、大学で真面目に勉強したことだけが理由ではありません。もともとフロンティアに踏み込む野蛮さを持っているから、大学で学んだ知識が生きるのです。そういう人材を求めるなら、むしろ日本は「野蛮な大学」を取り戻すことを考えるべきではないでしょうか。

（酒井敏（さとし）『野蛮な大学論』より）

問1 空欄 [あ] ～ [う] を補うのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① さらにいえば　② まして　③ なぜなら　④ だから　⑤ それでも

問2 空欄 [A] 、 [B] を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

A ① 縦横無尽　② 試行錯誤　③ 人跡未踏　④ 自由奔放　⑤ 前途多難

B ① 規範性　② 合理性　③ 独創性　④ 汎用性　⑤ 恣意性

問3 次の一文を挿入する場所として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

いわば、荒野の歩き方を早い段階で学ばなければならないのです。

① 【Ⅰ】　② 【Ⅱ】　③ 【Ⅲ】　④ 【Ⅳ】　⑤ 【Ⅴ】

問4　本文を三つの段落に分けるとすると、[2]～[23]のうちどこで区切るのが適当か。二つ目と三つ目の段落の先頭の番号の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① [9]｜[14]
② [9]｜[15]
③ [9]｜[16]
④ [10]｜[15]
⑤ [10]｜[16]

問5　傍線部1「学術研究」とあるが、これをどのようなものだと筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① 一般人にわからないだけではなく研究をしている本人にも、自分がいま何を研究しているのかが理解できていないものだと考えている。
② 前もって結果がわからないものの、謎があるかぎり解明し続けていると、事後的に役に立ったと思えることもあるものだと考えている。
③ 一つの課題を何人もの研究者が協力し合って解いていると、当初考えていた以上の素晴らしい結果が生まれてくるものだと考えている。
④ 教科書通りにしていても面白くないので、自分の好きなようにしていると、教科書と同じ結果を導くことができるものだと考えている。
⑤ 人から何の役に立つのかと言われてもめげることなく何度も失敗を繰り返し続けていると、必ず真理に到達できるものだと考えている。

問6　傍線部2「研究者を育てる教育」とあるが、これはどのような教育か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① 理性を働かせているだけではユニークな結果が生まれないので、感性を用いた方法にいっしょに取り組んでいく教育。
② 教科書を学ぶだけでは新しいものは生まれないので、教科書に書かれていない方法を対面で手取り足取り授ける教育。
③ 未知の領域を進んでいかなければならないので、失敗にめげず、何度も挑戦していく強い精神を作り上げていく教育。
④ マニュアルが最初から存在していないので、いかにやれば効率的であるかを考えながらマニュアルを作っていく教育。
⑤ 既存の知識体系を教えるのではなく、いっしょに試行錯誤を繰り返しながら、必要な作法や感覚を伝えていく教育。

問7　傍線部3「大学を『高校化』しつつある大学改革は、根本的なところで方向性を間違っているとしか思えません」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① 本当は対面授業のほうが効率よく知識や技術を教えることができるのに、オンライン授業を行おうとしているから。
② 新しいものを生み出すためには「野蛮さ」が必要なのに、実用的な専門的な知識や技術を教えようとしているから。
③ 米国の大学生よりも日本の大学生のほうが文明の知恵を多く持っているのに、それを前提とした教育ではないから。
④ 基本的な知識や技術などは必要なく、「野蛮」な生き方を身につけ、道なき道を生きていかなければならないから。
⑤ 生得的に自主性や主体性を持っている米国人と、そうではない日本人とでは、教育の仕方を変える必要があるから。

問8　本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

① 産業界は即戦力になる学生を求めているが、あまり勉強をしない、今の日本の大学生にそれを期待するのは無理というものである。

② マニュアル教育を行うのではなく、小さい時から自主性や主体性を身につける教育を、米国のように日本も行わなければならない。

③ 知的能力の高い優秀な学生よりも、野性味にあふれる学生のほうが、国際的な舞台で活躍しようとする学術研究者には向いている。

④ 社会を安全に効率よく動かすには、多くの人が同じ常識を持つ必要があるものの、それではフロンティアを切り拓くことは難しい。

⑤ オンライン授業でやれる程度の教育は学習効果もしれているので、オンライン教育は一切辞めて、対面の授業に戻すべきである。